

# なんてったって・パキスタン

手塚 紀恵子

今年も又、なぜかやっぱりパキスタンにでかけてしまいました。そして、山もやっぱりNO-SUCCESSでも、また行けたらなあなんて、けっこうめげずにいる私です。山が困難であればあるほど燃えてくる。その山屋気質かもしれないけれども、その困難さが山以前の問題にあってたりするのがパキスタンだ。たりして、それでもめげずに乗り切っていくパワーってのは、もうやじ馬気質ってものの類かもしれない。さらに、私の場合は、昨年度の免疫がしっかり効いてた。って感じもあって、今年も又トラブル込みのトラベルでも、それなりにけっこう味わい深いものがあったのです。雑念を排して、しほじほじ山と対峙する事にだけ集中したいという向きには、め、たに勧められないお国柄かもしれないけれども。

今年の山は、スワット渓谷奥の、夢見るような美しい名のファラフサール(5918m)。山容もその名に恥じず、猛々しくもあり、しなやかでもあり、目にうるわしく心には甘美、実にきれいな山でした。それに、アルプス的景観やガンダーラ美術の宝庫として名高いスワット・バレー、憧れのアフガニスタンに連なるヒンズークシュの山々、それを愛でるだけでもいいな、って旅行。てみたい所でもありました。

さて、今年のパキスタンは、なぜか異常気象という事で、来る日も来る日も雨又雨。車で入れる最奥の村カラームに着いたのも、重苦しい雨の午後。この警察で、「この地域は、トライバル・エリア(アフガニスタンとの国境付近に住むパシュト一族の中には、今だにパキスタン政府に服従していない人々がおり、彼らの住んでいる地域をそう呼ぶ)に近く危険なので警官を同行せよ。そうしない場合には何が起きても当局は一切関知しないから。」とか言われて、まずはギョッとさせられる。彼らに襲われた場合には、物を盗まれるとか怪我をさせられるとか、そんななまやさしい事じゃあすまないだそうで、殺されちゃったりしても彼らのモラルの範囲なんだとか、おまけに女性にはレイプというおまけまでつくんだとか、*"Do you know rape?"* と念まで押されて、女でえらい悪か。たわね! と心の中で怒ってむけたが、アフガンに埒致されて波乱万丈の余生を楽しむならまだしも、山も見ずに惨殺されちゃうんじやサバサバしすぎ? 目もあまられない。結局、翌日一日がかりであちこち回って、警官2名同行してもらう事に決定、「あなたのために必要なんです。あ

なたが女でありガードが必要である事を見せに行く。」とか言われて、私もカラムの警察に連れていかれたリして気を悪くしいしい、こりゃあ大変な所に来ました。たもんだ、とそぼ降る雨の中で、心に暗雲たれこめる思いがしたものです。

でも、実際ここいらの人は銃かついでる人も結構多いし、迫力ある旅人(ガイドの弁によれば、ケトラルの方から来るハッシッシヤマリファナの売人だとか)は例外なく武装しており、相手が武装しているのにこちらが非武装ってのは、これはもう犯罪を挑発してるようなもの、こちらも武装するのは「礼儀」ってものかもしれませぬ。銃砲かついで同行してくれた2人のおまわりさんには、ただ感謝あるのみです。



(同行してくれたボリスの1人。アグバル・ハーンは、正義の味方!でした。)

そして、ファラクサールのB.C.に行った事があるというポーターを道案内に、ようやくキャラバンを開始した喜びも束の間、次なるトラブルは、“Where is the B.C.?” 標高3000m位の谷浴いのお花畑、ポーターはここをB.C.だと主張(ふざけるな! B.C.は氷河の末端の3900m地点だ!)、おまけにファラクサールの登路は谷の側壁の滝ん所だと、信じられん事を言うのです。手分けしてルートファインディングもしておたり、ああだこうだとすさまじい驚いでのディスプレイもしておたり、あれっきゃないって言うならあれを登る、きゃないななんてもやたら納得しておたり、「危険だからいやだ。」とポーターの半数は帰ってしまうし、心湿らす雨はあいかかわらずよく降るし、眠れぬ夜は一体いつまで続くのやら……。最終的には、やっほりあのルートはリスクが高すぎるからやめよう、という良識的な判断に落ち着き、「ハキスタンだったら、B.C.も見ずに帰途に就く事もあるだろう。」なんて、何とも潔い私でした。

だけど、登山中止は致し方ない状況判断としても、感情的にはけ、こうコントロールできない部分も心の奥にはあったりもしたし、それに「やっほり変じやない?」って点もあれこれあったりして、帰路につくという前夜は、千々に心乱れる私でもありました。……B.C.に入るのに危険な側壁を登るなんて事があるんだら、これまでの記録に載らないはずはないんじゃないか?とか、あのルートを登ったとしても見えてるのがファラクサール南面だとすれば、北面に回り込む正規のルートとは違うんじゃないか?とか、地図のない旅の中

では現地の人達を信用せざるを得ないとは言え、3000mをB.C.だと言った男が、それより上部にある滝がルートだなんてなんで断言できるんだろう？普通ポーターはB.C.までしか行かないわんだし、そこを登降する際を直接見た訳じゃないだろうに！、それにガイドの通訳も、こう矛盾点が多かった……、等々あれこれ考えているうちに、眠くな。マ夢を見たのか、神経細胞が異常に興奮して幻を見たのか、とにかく目の前に沢の奥のうるわしきB.C.がワーンと開けてきて、やっぱりB.C.に平和裡に入る別のルートがあるんじゃないか、たとえパキスタンでもB.C.入りも果たせずにおメオメと帰。マなるものか、なんて夜はやたら強気になる癖もある私です。

そして、翌朝、オズオズと話を切り出して升ると、もう一回トライしてみようという事にあ。さり決ま。マ、二手に分かれてのB.C.探し。他のメンバーもそれぞれに心中總やかかなるものがあったよう。当然の事ながら。事ここに到。マは、シフトンの如き飽くなき好奇心こそ明日への希望をつなぐもの、ゆけマはいかんです。そして、B.C.への登路は、あたり前と言えど実にあたり前な所にちゃんあったのです。(ポーターの言。マたルートとはむしろ違いました。) どうしてあんな事になってしまったのか、今となっては不思議な位だけど、どうやら地元の人々は情報を正確に伝える事ができなかった。たまたまた、彼らから情報を収集するガイドには、あるいはさや矛盾点をつきつめていけるだけの論理性が欠如していたかもしれない。それに日本人はとりあえず何でも信じてしまうかもしれない。で、こうなるもあるべきB.C.もなくな。マしまう事になるよう。それにしても、ポーターとヒクトラルから来た売人と山の上の方に住んでいるコーヒスタン人の青年と、B.C.を知っているというこの人がある。英例の側壁がルートだと言。た、という事にな。マたんですよ。これは一体どういう事？悪いのは誰？あまり断定的な事言うとは叱られそうだけど、持つる情報を正確に相手に伝達したり、筋道をたてて物事を考えたり、全体と部分との関係で物事を整理したりする力。マ、日本人だったら当然の事のように身につけてたりしている事でも、系統的な学校教育の中でトレーニングする機会のない人々にと。マは、け。こうむすかし事だったりするんでしようね。それに、一つの事柄を強調するあまりに他の事柄の事実関係はどうでもよくな。マしてしまうようなあのデフォルトな悪感。マれには全く恐れ入。マしまう。(思い起こせば昨年のパキスタンでも「登。た事がある」と言う他パーティのガイドが“very easy, only hiking.”と言。マたルートがむすかしく。マ全然取りつけむれな。た、其の謎も今解けたような気がしました。うそをついているつもりはないんだろうけど、真実を語。マ通訳でもないわたいです。) この事の顛末の中で、ガイドは“you won't believe me!”と怒。マしま

ったが、このあたりの落差は埋めようもなく、“of course!”ときつく応え  
 て、国際協調のなすかしさをしそじそ悟ったものでした。

とにかく、一転して下山は中止、私達は奇蹟的にB.C.を踏む事ができたので  
 す。氷雨降る中、感慨もひとしおでありました。この時点で、登山期間の半分  
 はすでに浪費されてしまっており、いすれにしても雨だ。だから仕方ないや、  
 なんて慰めにもならないような事も考えたりして、悩ませない旅なのです。  
 (つづく)

